

第1部講義 藤原勉 本巣市長

現職の市長の講義ということで印象に残る点はいくつかあったが、3点を感想としてまとめたい。

1つは、市と県の違いである。県は地方自治体としての規模が大きいので1つの課題に対して体系を立てて解決へ持っていくという仕事の仕方であるが、市は「毎日市民」「毎日現場」と話されたところが印象的だった。また、どこの市もある程度はそうなのかもしれないが、課長以上の人事をすべて市長が担われているというのも初めて知った事実であった。自身が住む岐阜市との比較、研究を今後していきたいと考えている。

2つ目には首長と議会の関係性の中で話された「一目置かれる議員はやはり勉強をしている」という点だ。当たり前のことを話されているのかもしれないが、極端な話、議員は選挙を通れば行政に関して素人でも就くことが出来る立場だ。何も知らない人間に話されるのは役所も迷惑だろう。かつて田中角栄が経産相に就いた際、官僚と渡り合う為凄まじい勉強をしたというエピソードを本で読んだが、地方であっても同じことだろうと考えた。

3つ目には新聞で見られる「市長の動静」だ。24時間365日首長であり、議員と違って他にいない職責なので報道されるのは自然なことであるかもしれないが、やはり担っていくのは家族も含め大変なことだろうと想像した。

今回の講義で頂いた話、資料を含め今後の自身の研鑽に活かしていきたい。

第2部講義 上手繁雄 元岐阜県副知事

上手副知事のことは長く勤められたこともありこれまで何度もお名前を聞いたことがあったが、今回初めてお顔を知ると同時にとても面白い話をされる方だという感想を持った。政治的な話に関しては此度岐阜県の人口が200万人を割ったこともあり、ますます関心が高まってきた地方行政の課題について非常に為になる話が多かった。

なかでも「県なんているのだろうか」という非常にラディカルな言い回しがあったが、市町村と県の二重構造に関する指摘は考えさせられた。県とは「基礎的な自治体を補完する」という意義を持つが、それは市町村により力と施設を持たせれば機能する、とも言い換えられると感じる。もちろん警察をはじめとした県統括の機能を分権していくのは課題が多いと思われるが、これからの時代を既成概念にとらわれずに作っていく為には考えるだけでも価値があるかもしれないと思う。

道州制の話題もあくまで研究の段階であると思うが、自民党自身がかつてかなり話題にしていた改革案だと思うので再度勉強していきたい。個人的には講義でも上手講師が言われた「中央集権だったものをブロックで切る」という手段はアメリカ等とは逆の発想である為、

日本で成功するとは思えない、というのが現状思うことだ。

とはいえ、かつての大阪都構想の話題が上がった際、こういった根底からの改革が当てはまるのは都市部だけではないのだろうかと思ったものだが地方でもこれから研究していく価値がやはりあるのかもしれないと感想を持った。